

抗日戦争前の延安地区文学運動 上

秋吉, 久紀夫
近畿大学第二工学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/9812>

出版情報 : 中国文学論集. 4, pp.141-150, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

抗日戦争前の延安地区文学運動 上

秋吉久紀夫

延安地区の文学状況については、一九四二年の『文芸講話』以後は、割に明らかにされているが、それ以前は、資料不足の為に、不明な個所がまだ多い。この研究は、それを少しでも埋める一つの作業過程として、抗日戦争前（一九三七年七月）の時点の文学運動を、丁玲を中心にして考察したい。

一 丁玲『ソ区の文芸』の成立

一九三八年一月三十日に上海の南華出版社で出版された丁玲の『ソ区の文芸』（蘇区的文芸）は、抗日戦争前の延安地区の文学状況を記した貴重なものであるが、同時にいろいろと不可解なものを内在している。それについて尾坂徳司氏は、『丁玲入門』（五三年一〇月青木書店刊）で次のように述べている。

『ソ区の文芸』は実に奇妙な本である。中には

(1) 『発射されなかつた銃弾』（「一顆未出銃的槍彈」一九三七年四月）

(1) 『東村事件』（「東村事件」一九三七年六月）

(3) 『再会』（「重逢」一九三七年十月脚本）

の三作品が収められているにもかかわらず、『序言』はこの作品について少しもふれていない。そして、『ソ区の文芸』という作品集の題名は、そのままソ区の文芸を紹介した『序言』の題名として使える。これが第一の奇妙な点である。次に、『ソ区の文芸』は、陝西省（おそらくは延安）にいる丁玲が書き、上海の書店（南華出版社）が発行している。陝西は中共の治下であり、上海は国府の治下である。

これが第二の奇妙な点である。次に、三篇の作品を読むと非常に短期間に書かれたものであるにもかかわらず、その間に連脈がない。これが第三の奇妙な点である。しかしこの三つの奇妙な点はあるいは同一の基盤から生まれ出たものであるかも知れない。（七四頁）『ソ区の文芸』は、上海で発行され、延安では発行されなかつた。（七六頁）

また松山久雄氏は、『延安時代の丁玲とその文学』（『近代中国の思想と文学』一九六七年、七月、大安刊）の注で

『ソ区の文芸』（蘇区的文芸）は一九三八年上海・南華出版社刊であるが、これはおそらく国民党統治区向けのもので、

『霞村にいた時』一九五〇年三聯書店版の後記から推測すると、所収の三篇をふくむ類似の作品集が、おなじころ「一顆未出銃の槍弾」の標題でソヴェト区内から出版されたようである。

と指摘してある。

尾坂氏の、延安では発行されなかったという説も、松山氏の指摘も部分的には正当であったといえる。なぜならば、『蘇区の文芸』という書名ではないが、同じ内容の「一顆未出銃の槍弾」という書が、中華民国二十七年九月（一九三八年）初版で、「西北戦地服務団叢書之二」として、渝（重慶）の生活書店から刊行されていたからである。そしてさらにその再版が翌年の三九年四月、S（おそらく上海）の生活書店から出版されていた。内容は、

- (1) 『前線に行く』（「到前線去」）
- (2) 『南下する部隊でのメモ』（「南下軍中之一頁日記」）
- (3) 『彭德懷素描』（「彭德懷速寫」）
- (4) 『警衛団の生活の一駒』（「警衛團生活一斑」）
- (5) 『発射されなかった銃弾』（「一顆未出銃的槍彈」一九三七年四月十四日）
- (6) 『東村事件』（「東村事件」一九三七年六月）
- (7) 『後記』（「最後一頁」七月十一日西安）

この書を出版するに至った経緯について、彼女は『後記』（「最後一頁」）で次のようにのべている。

去年抗日戦争勃発後、わたしは前線行きを準備した。

ひとたび出かければ幾年にもわたるはずと考えていたけれど、これら（印象記、通信）の文章の出版のことは、一向に気にならなかった。わたしはただ一つところに保管しておく、将来の執筆素材にでもなればと思っていて。でも一年にもたたなくて、これらの原稿を持ちかえってみた時には、わずかこの数篇しか残っていないかった。わたしは別にひととがめたりはしない、もともとこれらの品はとくに持ち出すべきものだったし、しかも、わたしがこれらの原稿を比較的ちゃんとした場所に置いておくべきだったから。現在わずか数篇しかないとはいふものの、わたしはせめて記念をとどめるものとして残しておきたい。

執筆日付の「七月十一日」は、「去年抗日戦争勃発後」とあるので、「一九三八年七月十一日」のことで、これは一年間「西北戦地服務団」を組織し前線めぐりして「西安」に辿りついた時期である。

しかし上海（上海の南華出版社）の南華出版社から刊行された『蘇区的文芸』は、一九三八年九月に重慶で初版された「一顆未出銃の槍弾」の同書の、書名を変えたままで、出されたものではない。これはそれは全然別個に作者丁玲に正式な了解を得ることなく、刊行されたものである。

さきの尾坂氏の疑問の一つであった『ソ区の文芸』の書名と、ソ区の文芸を紹介した『序言』との関係についてのべてみよう。『解放』周刊の第一卷第三期（一九三七年五月十一日）に『ソ区での文芸』（「文芸在蘇区」）を丁玲は掲載している。執筆日付は一九三五年四月十五日となっている。かりにそうだとすると、

三五年四月十五日は国民党に捕えられて、莫干山から南京に移され、さらに農村で強制的に呼びよせられた母親と同居、腸チブスを患っている時期で、執筆の余裕も、情報連絡もなかった。また「文芸在蘇区」の内容から考えてみても、一九三七年の明らかなき誤植である。一九三七年四月の丁玲は、延安の警衛団副主任をしていた。「序言」と「文芸在蘇区」の前身は、同一である。「解放」週刊は、一九三五年冬陝西省互審堡で復刊された「紅色中華」（これは一九三七年一月二十九日西安事件後、「新中華報」と改名された。）と同じく、中共党中央機関誌報で、一九三七年四月二十四日、延安で発行された。（文琪「抗日戦争時期中国党報和主要進歩報刊簡介」張静盧輯註「中国現代出版史料丁編」一九五九年十一月中華書局出版二八二頁、釋欣「一九三七年至一九四五年新聞界大事記要」前に同じ三三四頁）発行所は延安県新華書局である。

「蘇区的文芸」の「序言」は、「文芸在蘇区」というまとまった一つの文であった。それは、一九三七年四月、長征中に持ち廻っていた石版台や軽便印刷機（エドガー・スノウ「新版中国の赤い星」宇佐美誠次郎訳、筑摩書房刊一九頁）に代って、上海の印刷技術者のグループが、西安からトラックで持ち込んだ新式印刷機が動きはじめて（A・スメドレー「偉大なる道」下、阿部知二訳、岩波書店一二八頁、ニム・ウェルズ「人民中国の夜明け」浅野雄三訳、新興出版社一四三頁）創刊されはじめた大量の「解放」週刊に掲載するために書かれたものと考えられる。

また、「蘇区的文芸」に集録されている「一顆沒有出鎗的槍弾」は、「文芸在蘇区」の執筆された前日の作であり、六月に書いた「東村事件」とともに、やはり「解放」週刊に掲載され

たものである。（「解放」への発表は単行本「一顆未出鎗的槍弾」の「最後一頁」に記されている。「東村事件」の餽が「解放」週刊第一巻第五期、一九三七年五月三十一日号にのっているので、「一顆沒有出鎗的槍弾」は、第一巻第一、二期と推定される。）

このように見てくると、以上の三篇については、みな「解放」週刊にもとづくことが判明する。次の「重逢」は、少し事情が異っている。

脚本「重逢」の日付は、一九三七年十月である。これは明らかに抗日戦争が勃発し、西北戦地服務団をひきつれて前線へ赴く直前の作である。彼女の西北戦地服務団の記録集「一年」（西北戦地服務団叢書之九、中華民國二十八年三月初版、五月再版（一九三九年）、生活書店（重慶、桂林、上海、香港、西安、昆明、成都、長沙、蘭州、貴陽、南昌、金華、福州、汕頭、宜昌、洛陽、長治、立煌、迪化）星島店発売）があるが、このなかに、「重逢」の次の作品である三幕劇「河内一郎」（西北戦地服務団叢書之四、延安を出発し西安での作）後記」が収められている。そこで次のように云っている。

最初の独幕劇「再会」（重逢）は、やはり延安で書いたものです。時にある脚本の編集委員会が開かれ、わたしは戦場で捕虜となった後どのように対処すべきかを書くよう割り当てられた。この脚本は延安で上演され、すこぶる好評を博したが、のち山西では、もともとわたしのあまり納得できる作品でなかったから、あまり上演しなかった。だから投稿することもしなかった。あとで聞くと宋的さんがこの脚本のガリ版刷を手に入れられて、雑誌「七月」に発表され、一部単行本にも収録されたとのこと、わたしは耳

にして非常に羞しい気持がいたします。そのうえ多くの場所
所で上演され、国立演劇学校から上演料をも送ってきまし
た。このこのはわたしにとつて激励ともいわねばならない
のですが、どうも自信のない作です。のちに「再会」は手
を加えました。上海雜誌公司出版の西北戦地服務団の戯曲
集のみが、修正本です。(一二二頁)

これを裏付けるように、民国二十七年一月(一九三八年)、広
州抗戦文芸社から丁玲作「重逢」が出版され、同年四月広州大
馬路七十三号にあつた熱血書店から宋達夫選編「戦時戲劇叢書
第一冊」(これは丁玲作「重逢」のみ収録)が、さらに同年八月、
前述の「西北戦地服務団戲劇集」丁玲、奚如編が上海雜誌公司
渝(重慶)店から出版されている。なお「河内一郎」は民国二
十七年(一九三八年)七月、生活書店漢(漢口)店から出版され
た。(舒暢「抗戦初期内地出版戯劇目」、一九五六年三月中華書局刊「中
国現代出版史料丙編三三〇頁」)

すなわち「重逢」は、丁玲の意に反し、当時広範囲に流布さ
れ、容易に入手できたものであつた。

以上のような諸点をまとめると、丁玲作「蘇区的文芸」の成
立は、ほぼ明らかになる。

つまり、丁玲が自分の意志で、一九三八年七月十一日西安で、
延安地区に来てからの作品を一冊にまとめようと決意して、一
九三八年九月に単行本「一顆未出銃の槍弾」を重慶の生活書店
から上梓したのは、全くかかわりなく、上海の南華出版社が
三篇(「文芸在蘇区」、「一顆未出銃の槍弾」、「東村事件」)所載
の「解放」周刊及び「重逢」所載の雑誌「七月」(胡風主編)を

手に入れ、一冊にまとめ、「文芸在蘇区」を「序言」と改め、
「蘇区的文芸」という書名をつけて刊行したことになる。

それは上海だけでなく、国民党地区の知識人、学生に、全くウ
ェールの彼方にあつた長征後の、華北ソビエト区の文学状況
を早急に知らせるためであつたのと、やはりまた女性作家丁玲
の無事のお知らせ、抗日戦争遂行のための作家文化人の奮
起をうながしたものと考える。上海の南華出版社は、この書
外に民国二十七年三月(一九三八年)に、平凡「十年来的中国共
産党」や王明「全国総抗戦と保障抗戦的胜利」、葛扶南「長期
抗戦中的国防計画」を出し、国民党中央宣传部に発禁を受けて
いる。同様に丁玲の一九三八年生活書店刊単行本「一顆未出銃
の槍弾」も、一九三九年一月上海緑葉書店刊の単行本「東村事
件」、一九四一年二月青年文化社刊の丁玲女士「一天」も発禁
処分に遭っている。(「国民党反動派查禁九百六十一種書刊目錄」—
「中国現代出版史料丙編」一七三頁)。こつした状況から、抗日戦争
中しかも国共合作といつた事態であつたにしろ、延安ソビエト
区の現状を広く知らせることは非常に困難だつたはずである。

「蘇区的文芸」はこの嚴重な網から漏れた書の一冊であり、当
時の延安ソビエト区の文学運動を紹介した貴重な書物であつた。

2 紅軍内の文芸活動

ところで、丁玲を中心に抗日戦争前の延安ソビエト区文学運
動を眺めるには、一応この時期の彼女の足跡を説明しておきた
い。

一九三三年五月十四日(二七才)、丁玲上海で国民党に逮捕

された。三六年五月(三〇才)脱出すべく北京へ赴く。九月十八日上海へさらに汽車で西安へ。十月二十日西安出発、十月三十一日保安到着、十一月中旬陝甘辺区の前線視察。西安事変の十二月十二日後、定辺から西安北方三原へ彭德懷部隊とともに南下する。三七年二月(三二才)スメドレーを連れて延安にかえる。延安にて警衛団副主任を務める。四月十四日「発射されなかつた銃弾」執筆。四月十五日「ソ区での文芸」執筆。六月「東村事件」執筆。七月七日抗日戦争勃発。時に奚如夫婦と抗日軍政大学内に住んでいた。八月十一日西北戦地服務団結成、丁玲主任、奚如副主任となる。四十日間延安にて訓練、十一回の公演をおこなう。その間「再会」執筆、十月一日黄河を渡って前線へ出発した。(「一顆未出銃の槍弾」八七頁、「女戦士丁玲」一九三八年十二月十五日毎日譯報社刊、二八頁、三七頁、四〇頁、四六頁、「丁玲傳」陳彬蔭編、民国二十七年(一九三八年)三月初版、五月再版、八六頁、九八頁、一〇一頁、一〇三頁、「中国の歌こえ」アグネス・スメドレー、一九四三年、高杉一郎訳昭和三十三年、みすず書房刊、一三五頁、一四二頁、ニム・ウェールズ「人民中国の夜明け」一九三九年、浅野雄三訳一九六五年五月新興出版社刊、七九頁、二九三頁、丁玲「一年」民国二十八年三月初版、五月再版生活書店刊三頁、五頁、一五頁、二二頁、四一頁、「解放」第一卷第一期、第五期)

丁玲は「ソ区での文芸」(文芸在蘇区)で、一九三七年四月時点の延安地区の文芸活動を次のようにのべている。

ソ区の文芸は、現在にいたるもまだ「阿Q」(魯迅の作品、「阿Q正伝」)のような芸術的に熟した作品を生み出してはいない。「真夜中」(矛盾の作品「子夜」)や「八月の郷村」

(蕭軍の作品「八月の郷村」)みたいな、農富で新鮮でスケールの大きな描写もみあたらない。でもそれなりの特徴は具えていて。ちょうどソ区の演劇運動とおなじように、大衆化し、普遍化し、ふかく群衆のなかに喰い込んでいる。高く深くはないが、大衆の喜ぶところとなっている。それは現在紅軍部隊内のいろんな新聞や壁新聞、たとえば「紅星」「戦士」「火線」「抗戦」……などに表われている。これらは非常に沢山のおもしろい短篇や詩歌で埋められ、文学的な描写方法が使用され、紅軍部隊のいきいきとした生活が描かれている。これらのミニ新聞には、ガリ版あり活版ありだけれど、紅軍首長のデスクの上にある。電話機の傍にあらうが、あるいは戦闘員のポケットにはいつている。それが愛されていて、だれもが読まずにはおられないのを発見できる。これらの文章は、どれもみなあの中隊の政治工作にあたっている者や、最前線にいる各級戦闘指導員が書きおくって来たものである。誤字のないのは非常にまれだし、きれいに書いてあるのも非常に少い。でも自分をまじめに表現してあるために、かれらはこの紙切れをあの幼稚な書き方をして中隊の壁新聞同様に愛している。中隊では大部分の戦闘員が、なかには雑務員までもが、筆を握るのは得手ではないが、ものを云うには事欠かないので、かれらは倦くことなくだべり、書けるものの手伝いを引受ける。そして翌日になると、中隊じゅうの者が、熱心にそこに突立ってかれの作品を読んでいる、紅軍部隊だけがこうなのでなく、あらゆる機関、あらゆる大

衆団体、たとえば婦人会、労働組合、農業組合、工場、学校等のミニ新聞や、レーニン室の壁新聞にも同様にいろいろのちがった生活の描写が並んでいる。そういうわけで印刷業の発達していないソ区とはいえ、文芸の花は、たとえわずかな野の小花であっても、どこでも海の鷗のように映え、みごとに美しさをあらわすものだ。

ソビエトを創設したひとびとと、あの土地革命から成長してきたひとびとは、新生の明るい気分にあふれ、各種の工作部門でユニークな作風を発揮している。文芸面でも、活発で、軽快かつ雄壮な特徴を示しているが、とくにとりあげるとすれば、全中国よりずっと豊富に行き渡っている歌謡歌曲がある。それらは江西、福建、四川、陝西など八九省の民間歌謡の形式をとり入れているだけでなく、ぴたりとあつた新しい内容を盛りこんでいる。たとえば、『あなたが紅軍に入るのを送る』（送郎當紅軍）、『黄河を渡るうた』（渡黄河歌）、これらはみな不朽の佳作である。そして新しく偉大な第二回全ソ大会をつくりあげた『ラマルセイユ』や、『インタナショナル』にも比すべき『銃をとり前線へゆこう』（武装上前線「抗日戦争歌曲選集」一九五七年六月中国青年出版社刊、第一集一六三頁）など、これらの歌曲は紅軍の隊伍とともに四方八方に播かれ、いつまでも民間に歌われている。

紅軍内の文芸活動を彼女は適確に伝えている。この文章を書いた当時務めていた延安の警衛団の様子を描いた『警衛団生活の一駒』（「一顆未出銃的槍彈」一八、一九頁）にも中隊の救亡室（

レーニン室）と、晩会を彼女は記しているが、その模様は大体江西ソ区から長征中にひきつがれて来た方向と同一である。

江西ソ区から長征までの詩歌（文学）運動については、かつて拙稿『江西蘇区での詩歌運動関係資料』（一九六八年十月、中国文学評論社刊）に考察したので省略するとして、長征後の紅軍内の文芸活動を、二・三、次に寸描してみたい。

一九三五年七月から八月、大雪山を越え、岐山山脈を踏破中の長征の紅軍第一方面軍は、折しも七月二十五日から八月二十日にかけて、モスクワで開催されていた『コミンテルン第七回大会』に呼応して、『八・一抗日救国宣言』を全国の同胞に発した（波多野乾一『中国共産党史』第六卷八八頁）。十月二十日には、胡宗南部隊、回教軍部隊、旧東北軍との激戦の末、一九二七年以来陝西省北部で戦っていた劉子丹の遊撃隊と合流した。さらに十一月下旬には、徐海東指揮の紅第十五軍団と東村一帯で合流し、直羅鎮での戦闘に大勝して瓦窑堡に落ち着いた（『星火燎原』一九六一年六月、中国人民解放軍三〇年徵文編輯委員會編、人民文学出版社刊第四卷、徐海東『奠基天』九頁。劉占江『保衛瓦窑堡』三〇頁）。十二月二十五日中共中央は、瓦窑堡で、抗日民族統一戦線の戦略を決定（『目前形勢与党的任務』何幹之主編『中国現代革命史』一九五八年九月三聯書店刊一八九頁、毛沢東文献資料研究会編集、北望社一九七〇年七月刊『毛沢東集』第五卷一九頁）し、一九三六年二月、紅第一軍団と第十五軍団は黄河を渡って、太原近くまで七十五日間の東征をおこない、五月中旬には紅第一軍団（林彪軍長、聶榮臻政治委員）と紅第十五軍団（徐海東軍長）はさらに西征を開始し、十月八日会寧、静寧地区で、紅第二方面軍（賀竜）

中国人不打中国人

王尚周詞
徐銳林曲

5 5 | 1 | 1 2 1 2 | 3 1 | 5 | 5 — | 1 1 | 6 | 6 6 5 | 4 6 | 5 | 5 — |
 中国 人 | 不 打 | 中国 人, | 中国 人 | 不 打 | 中国 人 |

6·6 | 6·5 | 4 | 3 4 | 2 1 | 2 | 3 — | 5·5 | 6·7 | 1 2 | 4 3 | 2 | 7 | 1 — |
 我 們 | 別 給 | 日 本 当 | 开 路 | 先 鋒, | 我 們 | 要 为 | 民 族 | 解 放 | 斗 | 争 |

1 1 | 0 1 | 6 7 6 5 6 | 4 | 3 | 0 2 | 1 | 1 2 | 6 | 5 | 4 | 5 | 6 | 6 5 | 4 |
 倭 寇 | 屠 杀 了 | 我 东 北 | 父 老, | 又 | 进 | 关 东 | 蹂 躪 | 我 們 | 四 | 万 万 | 同 |

3 | 2 | 2 — | 6 6 | 0 | 1 | 5 | 6 | 3 5 | 6 5 | 0 1 | 6 | 0 | 2 3 | 1 2 |
 胞。 | 听 吧! | 爹 媽 兄 弟 | 在 老 家 | 哭 叫, | 男 敢 的 |

3 1 | 6 6 | 2 3 | 1 2 | 5 | 0 | 5·5 | 4·5 | 6 · 5 | 6 5 | 4 3 | 2 | 0 | 2 3 | 1 2 |
 抗 日 | 战 士 | 遍 地 | 祭 号! | 我 們 | 决 不 | 再 | 自 煎 | 自 熬, | 叫 | 敌 人 |

3 1 | 6 6 | 2 3 | 1 2 | 3 — | 3 — | 1 · 3 | 5 — | 5 5 | 1 | 1 | 7 6 |
 笑 哈 | 哈 的 | 袖 手 | 取 巧, | 弟 兄 們, | 中 国 人 | 不 打 |

5 | 6 | 3 — | 2 | 1 | 1 | 2 | 3 — | 2 3 | 1 | 1 | 7 |
 中 国 人! | 携 起 | 手 来, | 打 回 | 老 家 |

6 — | 5 | 1 | 1 | 7 1 | 2 — | 5 · 3 | 2 · 2 | 1 — |
 去! | 携 起 | 手 来, | 打 回 | 老 家 | 去!

第四方面軍（朱德）と合流した。その間、一九三六年五月中旬七營川、清水河で旧東北軍（何柱国）に救国宣伝教育をおこなう『流亡三部曲』（『抗日戦争歌曲選集 第一集八五頁』）『故郷へ引きかえそう』（『抗日戦争歌曲選集 第一集五一頁』）や『中国人は中国人を打つな』（『中国人不打中国人、同上七三頁』）を歌った（『星火燎原』第四卷一〇三頁）とある。東征中の記録では一九三六年三月中旬に、紅第十五軍団が、山西省中央部から西北部へ、ついで嵐県、興県、白文鎮と進撃するさなかに、「説書、唱戯、搞音楽、弁小報」をおこなったとあるが、（『星火燎原』第四卷四六頁）、講談や演劇や音楽をおこない、ミニ新聞を発行した。

また『星火燎原』には、一九三六年十月初旬、第二方面軍と第四方面軍を出迎えるために、六盤山を越え、はるか異石鋪で待機していた紅第五団の政治部宣伝隊の活躍が描かれている。（第四卷一〇四頁）

エドガー・スノウは、一九三六年六月での紅軍の詩歌活動について

かれらはほとんど一日じゅう道中で歌った。かれらの歌は次から次へと無限につづいた。かれらの合唱は命令によるのでなく自発的であったが、うまく歌った。誰かが気がむくか、また適当な歌を思いつくと一人が急に歌いだす。すると小隊長とその部下が加わる。なれらは夜でも歌った。そして、陝西の胡琴を持った農民から、新しい民謡を習った。（『中国の赤い星』宇佐美誠次郎訳、筑摩書房刊五六頁）

とのべ、レーニンクラブをかれは、

各中隊、各連隊にレーニン・クラブがあった。あらゆる社会的な「文化的」な生活は、ここが中心になっていた。(同前、二二九頁)

どのレーニン・クラブにもまた壁新聞があった。兵隊から選出された委員が、新聞をつねに最新のものにしておく責任を持っていた。少くとも壁新聞はレーニン・クラブの「図書室」よりずっと最新の記事が多かった。蔵書はおもに、中国赤軍の正規の正規の教科書や、講義録や、ロシアや、白軍の地域でひそかに入手したり奮取したりしたいろいろな雑誌や、「新華日報」、「党工作」、「闘争」その他のソビエト地区において出版されたものなどであった。(同前、二二二頁)

といい、一九三六年九月での予旺堡に駐屯していた第二師団第三連隊第二中隊のレーニンクラブの九月一日付壁新聞を代表的なものとして例にひいている。

紅軍部隊内での演劇活動は、一九三五年十一月、紅第二方面軍と第十五軍団とが合流した折、楊泉源で戦勝大会がひらかれた。その際紅第一方面軍の張雲逸と劉亜楼が、直属劇団を伴って演技を披露した(「星火燎原」第四卷一四頁)とあるように、それぞれの軍団には、それぞれの劇団があった。

一九三六年九月、太堡子の第一軍団彭德懷部隊の劇団について、スノウは「中国の赤い星」(二六七頁)に誌しているが、ニム・ウエールズは、一九三七年四月三十日、三原をわずか三十分はなれた雲陽の彭德懷總司令部で、前線劇団主任李伯劉(前線政治部主要楊尚崑夫人)に会っている(「人民中国の夜明け」四〇頁、

彼女については「中国文芸座談会ノート」16の樋口進氏の論文に詳しい。)それはともかく、江西ソビエト区からの演劇運動の指導者である李伯劉が、前線軍団での演劇に直接的にたずさわっているのは、注目すべきことである。

出しものは、「生き新聞」(活報)と呼ばれる独特の即興劇のほか、李伯劉や成仿吾のかいた台本、その他江西ソ区で生まれた「亡国奴となるな」(不韋亡国奴)、「銃をとって前線へ」(武装上前線)や、長征中の作である「破れ草靴」(破草靴)などが、紅軍内で上演されていた。(傅鍾「關於部隊的文芸工作」—中華全国文学芸術工作者代表大会紀念文集—一九五〇年三月、新華書店刊九頁)

3 『二万五千里長征記』

さて丁玲は延安ソビエト区の文学運動の異質な特徴として、「文芸在蘇区」で、「二万五千里長征記」という応募文運動を熱っぽい口調で説明している。

あらたな奇蹟にも似た事柄が、すばらしい勢いでまた発生した。これは長征の「二万五千里」を書くことである。とりかかったときは、原稿募集を通知した後でさえ、すこしも自信が持てなく、ヒヤヒヤしていたが、どうして、東西南北から、数百里、一千里のはるから、はては遠い砂漠の三辺から、眩光りする洋紙や、紙に書いた色とりどりの原稿が、驢馬の背にのって、塞北の景色を眺め、砂ぼこりを存分に舐め、数知れぬ谷をわたり、鞍になり、ばけた字が、みんな手足をのびのびと伸ばして、編集者のデスクの

うえに身を横たえた。そこには一つ二つの崩れるばかりの顔がくつきあっている。ふるえる指先で一頁一頁めぐりながら読んでゆくと、原稿は一尺の高さになり、二尺の高さになった。幾百もの手が机のないところで、小さなランブの下でぎつしりに書いたものであった。そこで編集する者は、睡眠をもとらないで、晝も夜もこれらの意外に立派に書いてある文章を、整理し清書した。長征へ出発する前から編集しはじめ、一路陝北に到着するまで、さまざまの勢いの鉄の奔流である幾十万の血肉は、猛烈な砲火や鋼鉄でつくった長城や、攻め落すに手のない荷酷な自然との戦いをなげまぜながら、そしてまた絶えることのない転戦中に、自らの内部で分岐するあやまった意見とも闘争せねばならなかった。一駒一駒がなんと心をうたずにおかない場面である。百数十人のなからすばらしいひとびとが誕生した。才気にあふれる作家艾平、彭雪楓、莫休、一氓、定一といったひとびとである。「夜烏江を渡る」(夜渡烏江)「大渡河の強行渡河」(大渡河槍渡)、「串山関前後」(串山関前後)、「再び遵義を占領する」(再占遵義)などは、出色の描写であった。この三十万字にもほる大著は、徐夢秋同志の労苦の編集をへて、すでに完了し、遠からず数千万の待ち焦がれている読者にお目見えするでしょう。

この「二万五千里長征記」は、民国二十七年(一九三八年)三月、趙文華名で大衆出版社から、もう一本は同年同月、朱笠夫名で上海抗戦出版社から刊行されたが、出版と同時に国民党中央宣伝部の手によって発禁処分となった(「国民党反動派査禁

九百六十一種書刊目録」-「中国現代出版史料内編」一七三頁)

莫休の長征記「橋を奪う」(槍橋)は、一九三七年五月十一日の「解放」週刊第一卷第三期に掲載されている。これは一九三七年四月二十日に執筆されたものから、前述の丁玲のことばと同時期に書かれたもので、丁玲は編集は終わったといっているが、まだ継続されていたものと推定される。「橋を奪う」の内容は、長征中の一大難関大渡河にかかっていた唯一の橋、瀘定橋争奪戦の様子を記録したものである。ここは太平天国の雄将石達開の大軍が、遂に渡河することができず、遺滅したところでもある。

いま、十六本のうす黒い鉄ロープは、静かにかつ手ごわく河の上に横たわっている。橋板は全部残らずはぎとられ、鉄ロープをはさんで敵の一個旅団とわれわれの一個連隊が橋の東と西とで向いあっている。そのうえ東岸の橋のわきの家と左右一里内の沿岸の、新旧いろんな建築物のうえには、機関銃の黒い嘴が、われわれへ向け突き出ている、ひっきりなしに蝗のような鉛弾を吐き出していた。

と莫休は(莫休のこの文は、朱笠夫編著「二萬五千里長征記」の民国二十六年十一月再版には、第五章に「槍橋」とあり、筆者の名は省れているが、同一文である。)、この歴史的事件を描写している。

ところで一九五五年四月、人民出版社の手によって編集、出版された「中国工農紅軍第一方面軍長征記」を開くと、さきに「文芸在蘇区」で丁玲が紹介した「串山関前後」(彭)雪楓、「再び遵義城を占領する」艾平、それに「老山界」(老山界)(陸)定一、「金沙江から大渡河到着」(従金沙江到大渡河)一氓な

ど、総計五十五の文章、執筆者二十八名が集録されている。これは丁玲らが編集の手助けをした『二万五千里長征記』の集大成といって間違いない。

この画期的な既成作家と無名戦士たちとの集団創作の形式は、解放後の文学運動のなかにも一貫して流れている。例えば一九六〇年二月、中国人民解放軍三〇年徵文編輯委員會編、人民文学出版社刊の『星火燎原』十巻がそれである。

『二万五千里長征記』編集責任者は、徐夢秋（『丁玲伝』九四頁、一〇二頁、『女戦士丁玲』三六頁、『一年』三頁）であって、丁玲ではない。ただ当時陝北にいた丁玲（『丁玲伝』一一二頁）、成仿吾（『人民中国の夜明け』一四七―九頁）など少数の文化人たちの主な工作任務だったというのである。

そしてさきの丁玲の文でもあるように、かれら巨大な革命主体内部において、『長征へ出発する前から』企画され、実行されていたのが事実だとすれば、驚くべきことだといわざるを得ない。

しかし、スメドレーは一九三七年二月ごろ、朱徳と延安で語りあった折、彼女が長征記録の作製を進言したために、かれはさつそく、『中国革命の歴史をあつかう最初の調査委員会を延安に設けた。』（『中国の歌』一四六頁）と記し、また『中国工农紅軍第一方面軍長征記』で、『嚴重な包囲のなかで』（在重圍中）を含む三篇の記録をかいている莫文驊（劉少奇？）は、一九三六年八月五日延安の紅軍大学（のちの抗日軍政大学）の洞密の外の草に坐って、エドガー・斯诺ウの中国ソビエトと紅軍史に関する本を読み、折しも来た耿飈、楊成武ら多数の同学と、われ

われ中国人の手で、『二万五千里長征記』を書かねばならぬと話し合ったと述べている。（『星火燎原』第四巻一四九頁）ここから判断すれば、かれら巨大な革命主体内部での先見的な計画は、部分的にはあったとしても、漸次、形成されていったものと考ええる。

（一九七三年一月九日）